

δύα (～のゆえに)とἕνεκα(～のために)の関わり：  
プラトン『リュシス』篇におけるφιλῆν  
(愛する)を支えるもの

吉良, ゆかり  
九州大学大学院 : 博士課程修了

<https://doi.org/10.15017/1430797>

---

出版情報 : 哲学論文集. 33, pp.45-62, 1997-09-25. 九州大学哲学会  
バージョン :  
権利関係 :

διὰ (～のゆえに) と ἐνεκα (～のために) の関わり

——プラトン『リュシス』篇における φιλεῖν (愛する) を支えるもの——

吉 良 ゆかり

序

プラトン『リュシス』篇の主題を、当小論の主題「φιλεῖν (愛する) を支えるものとしての διὰ (～のゆえに) と ἐνεκα (～のために) の関わり」という言葉に集約してよいかどうかについては最終的に問題とされねばならないが、「友 (φίλος) を手に入れることに目がない (911e)」が、「とても友を手に入れるどころではなく、どのようにして人は他の人の友だちになるのか、ということさえ知らない (912a)」という言明から始まるソクラテスの問い質しは、何回もの検討手段の立て直しを経て διὰ (～のゆえに) と ἐνεκα (～のために) に辿り着き、その一点を執拗に追及していることだけは間違いない。διὰ と ἐνεκα と順次登場してくるこの二つの分析方法をあえて一 (つの) 点と語ったのには意味がある。

実はそれぞれの問題に入っていくとき、いずれの場合もソクラテスはあたかも直感や啓示を受けたかのように、一見唐突

に *dia* (のゆえに) *ye'veuxa* (のために) による分析を切り出して *ye* (216c-217a, 218c-d)。この導入の唐突さやそれ以後の両者の関わりへの言及の欠落を見る限り、両者は些かも連動していない二つの別々の問題であるかのように見える。しかし、事態を詳細に見ていくと、別の姿が浮かび上がってくる。まず *dia* (のゆえに) によってこれまでの命題が吟味修正されていくが、その終わり近くであるひとつのことがらに一瞬光が当てられる。しかしそれは言い放たれたままでさらに追及されることなく、たちまち暗闇の中に消えてしまう。実はこの問い質されなかった問題こそが重要な問題であり、次の段階の *ye'veuxa* (のために) を伴う分析導入の唐突さや、両者の関係への言及の欠落にもかかわらず、否、逆にこの欠落そのものが何らかの必然性、意義、あるいは意図をも含め、隠された問題の在ることをもの語っているように思われる。つまり、この問題そのものが *dia* (のゆえに) *ye'veuxa* (のために) の両構造に深い関わりが在ることを示し、その両者による構造がひとつの在り方を成すときにはじめて *philein* (愛する) が成立することをさらに示唆しているように思われるのである。無論この両者の関わりを不問に付した対話篇は、アポリアという結果で終わらざるを得ない。しかし、この欠落、不問という事態から逆照射して、対話篇は何かを語ろうとしていたのではないだろうか。そのような経緯をできる限り詳らかに辿っていくことが、この小論での目的である。

## 一 基本命題

- (1) *Tō dyadōn' apa tō mēte dyadōn mēte kakōn hōnōn hōnon symbaivēi gynesthai φίλου.* (216e7-217a2)

「すると結局、〈善きもの〉(y)〈だけ〉に対して〈善くも悪しくもないもの〉(x)〈だけ〉が友になる、ということになる。」

これが対話篇全体の3分の2ほどの地点でソクラテスが提示した命題(基本命題と呼んでおく)であるが、まずここに辿

り着くまでの経緯を概観しておく。

実質的な議論が始まったのは 212a8 からであるが、そのときの問いは「友愛 (φιλία) とは何か」でもなく、また厳密に言って「友 (φίλος) とは何か」でもなかった。それは「 $\langle x \rangle$  が  $\langle y \rangle$  を愛する場合、どちらがどちらの友となるのか。 $\langle x \rangle$  (愛する側) が  $\langle y \rangle$  (愛される側) の友となるのか、あるいは、 $\langle y \rangle$  が  $\langle x \rangle$  の友となるのか。それとも、どちらでもまったくかわりのないことなのか (212b)。」という三つの選択肢を掲げたものであった。要するに、「愛する (φιλία)」という動詞をめぐって主語、あるいは目的語に來たるものに照準を当てて (つまり、この  $\langle x \rangle$  と  $\langle y \rangle$  に友なるものを決定できるという意図のもとに) 問いが立てられていたのである。結局、 $\langle x \rangle$  や  $\langle y \rangle$  に友を規定しようとするこの試みは行き詰まってしまうのだが、この問い質しの在り方で注目すべき点がある。それは、先に述べたような「 $\langle \rangle$  とは何か」を直截に問うのではなく、はじめから動詞 φιλέω を主軸に据えた問いであるという点である。すなわち、この問いの形式により、 $\langle x \rangle$  (愛する側) と  $\langle y \rangle$  (愛される側) の二者の存在が必然的に結果してくることとなり、しかし、「 $\langle x \rangle$  と  $\langle y \rangle$  のいずれが友か」という論究方法ではなく、あくまでも  $\langle x \rangle$  と  $\langle y \rangle$  の関係性そのもののほうに、換言すれば、どこで φιλέω が成り立つといえるのか、という問題に、論究の照準が当てられていくのである。<sup>1)</sup> διὰ ἐνεκα によるさらなる分析は、この (1) の命題が土台となって行われている。いわば、(1) の命題成立を支える深層構造としての役割を両者は担っていると言ってもよい。

## 二 διὰ (～のゆえに) による分析

さて、基本命題 (1) はさらに次の (2) のように分析されていくが、もとの (1) と比較する (ただし (2) と対応させるために若干語順等を調整している) ことよって、より発展した考察がどの点に現われているかを以下に示しておく。

(1) <sup>①</sup>τὸ μῆτε ἀγαθὸν ἴσα μῆτε κακὸν φίλου γίνεσθαι τῷ ἀγαθῷ.

(2) <sup>②</sup>Τὸ μῆτε κακὸν ἴσα μῆτ' ἀγαθὸν φίλου γίνεσθαι τοῦ ἀγαθοῦ <sup>③</sup>διὰ κακοῦ παρουσίαν. (217b4-6)

「そうすると、〈悪くも善くもないもの(x)〉は〈悪しきもの(a)〉の現存のゆえに〈善きもの(y)〉の友になるといふことになる。」

① 同土に関しては、語順、格の相違が内容に影響を与えることはほとんどないと言ってよい。問題は(2)における②<sup>③</sup>が導く前置詞句の付加である。もちろん付加と言っても、意味的に①に何かが単純に足し算されたわけではない。<sup>③</sup>διὰは基本的には原因の内容を導く前置詞であるため、とりあえずは①部分の事態成立を支える原因の役割を果たしていると考えてよいであろう。無論ここではそうした辞書的意味以上の内実を探っていかなければならない。

実は②の<sup>③</sup>διὰの観点を持ち出すにあたって、ソクラテスは「身体〈善くも悪くもないもの(x)〉は病氣〈悪しきもの(a)〉がそこに現存することのゆえに、医術〈善きもの(y)〉を愛する」という実例を、その理由として提示する(cf. 217a-b)。つまり病氣が現存しなければ、身体(その場合は健康な身体であるため)は医術を愛し求めるといふいとなみは発生しない、すなわちここでは「病氣〈悪しきもの(a)〉の現存」がこの「愛する」の原因を担っている、と言っていることになる。

ただし、この②の「〈悪しきもの(a)〉が現存する」在り方にはさらなる条件が付け加わる(cf. 217b-c)。

② 〈善くも悪くもないもの(x)〉に〈悪しきもの(a)〉が現存するとき、

(イ) それ(x)自身が〈悪しきもの(a)〉になってしまっている

(ロ) それ(x)自身はまだ〈悪しきもの(a)〉になってしまっていない

という二つの場合があり、②のうちでも(イ)の場合であれば、〈善くも悪くもないもの(x)〉は〈悪しきもの(a)〉になってしまい、それが〈善きもの(y)〉の友になることはないゆえに(イ)は却下され、残る(ロ)の場合のみが①の「愛する」とい

ういとなみを生じさせる可能性を有している——というのがそれである。この両者の区別の実例として、(イ)褐色の髪に毛に老齡が白さをもたらす(白髪になる)↓白の現存によりそれ自身が白くなってしまふ(と)、(ロ)褐色の髪に毛におしろいを塗る(白さは髪に毛に現存するが、それ自身が白くなってしまったわけではない)の二つの場合を提示して、この主張の意味を具体的に明示している(cf. 217c-e)。

ではこれらの考察の後、何が確定したのか。対話篇はA↓Bの順で次のように語る。

A 「あるものが〈善きもの〉を愛し求める」が生じているとすれば(このことを成立させているのは (ロ))<sup>1)</sup>

(ロ) Ὀνόμου ὅταν μήπω κακὸν ἢ κακὸν παρόντος, ἀβη μὲν ἢ παρουσία ἀγαθοῦ αὐτὸ ποιεῖ  
ἐπιθυμεῖν.

(イ) ἢ δὲ κακὸν ποιοῦσα ἀποστρεφεί αὐτὸ τῆς τε ἐπιθυμίας ἅμα καὶ τῆς φιλίας τοῦ ἀγαθοῦ. (217e6-9)

(ロ) 「<sup>(1)</sup> それでは、〈悪しきもの〉が現存してもまだそれが〈悪しきもの〉にならなかついていない場合には、

<sup>(2)</sup> そういう仕方では、〈悪しきもの〉が現存することは、〈善きもの〉を欲求するようにそれを仕向けるものであり、  
他方の場合は、それを〈善しきもの〉にして、〈善きもの〉に対する欲求も愛をもそれから奪ってしまうものであり  
No。」

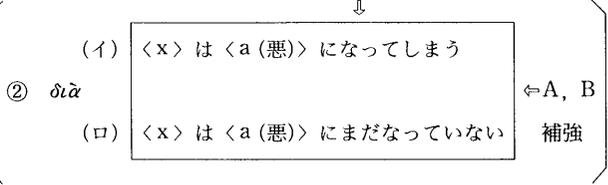
B 「ある者が〈知〉を愛し求める」が生じているとすれば(このことを成立させているのは(ロ))<sup>1)</sup>

(イ) οὐδ' αὐ' ἐκείνους φιλοσοφεῖν τοὺς οὕτως ἄγνοιαν ἔχοντας ὥστε κακοὺς εἶναι κακὸν γὰρ καὶ ἀμαθῆ  
οὐδένα φιλοσοφεῖν.

(ロ) λεῖπονται δὴ αἱ ἔχοντες μὲν τὸ κακὸν τοῦτο, τὴν ἄγνοιαν, μήπω δὲ ἐπ' αὐτῶν οὐτως ἀγνώμονες  
μηδὲ ἀμαθεῖς, ἀλλ' ἐτι ἠγνούμενοι μὴ εἰδέναι ἅ μὴ ἴσασιν. (218a4-b1)

基本命題(1) ① <x> は <y> を愛する

(2) ① <x> は <y> を愛する + διὰ ② <a> の現存 (のゆえに)



(3) —あるいは再び(イ)、(ロ)の区別なき(2)

(次の議論「*ἐνεκα*による分析へ」)

(4) φίλος ὃς ἂν εἶη, ... ἐστὶν τῷ φίλῳ ... ἐνεκά του καὶ διὰ τι.

(218d6-8 : 要約)

「およそ人が友であるときは、...何かのために、そして何かのゆえに、...誰かに対して友である。」

(イ)

「他方また、自分が無知を持つことによつてすでに悪しき人間になつてしまつてゐる人々も、知を愛することがない。なぜなら、悪しく無学な者は、誰一人知を愛することがないのであるから、といつてよいであらう。」

(ロ)

「するとあとに残るのは、その無知という悪を持つてはいるが、しかしまだそれによつて無知な者にも無学な者にもなつてはおらず、自分の知らないことは知らないとまだ考えてゐる人たちである。」

要するに、この地点までで「善くも悪くもないもの(x)に悪しきもの(a)が現存し、かつそれ(x)自身がまだ悪しきもの(a)になつてしまつていない場合に、それ(x)が善きもの(y)を愛し求める」ことが可能であると確認されている。そのうえで、次の(3)がこれまでのまとめとして登場する。

(3) —あるいは再び(イ)、(ロ)の区別なき(2)

... τὸ μήτε κακὸν μήτε ἀγαθὸν διὰ κακοῦ παρουσίαν τοῦ ἀγαθοῦ φίλον εἶναι. (218c1-2)

「... 善くも悪くもないもの(x)は悪しきもの(a)の

現存のゆえに〈善きもの(y)〉の友である。」

さて、この箇所の議論の構成をここで整理しておくと同頁の図のようになる。

この議論の流れを見ると奇妙なことに気がつく。それは、命題(2)で①「〈x〉は〈y〉を愛する」の成立を支える、いわば深層構造として *οὐκ* が登場し、さらにこの *οὐκ* による分節②「悪の現存」の内実には二つの在り方——(イ)と(ロ)——がある。と指摘され、(ロ)の在り方のほうが①「〈x〉は〈y〉を愛する」といういとなみを発動させる契機であることが確認されていたにもかかわらず、結局この箇所の議論では先の(3)の命題、つまり(イ)と(ロ)の区別を問はずして②の考察が全く顧みられていないもの(2)と同じ内容が帰結命題となつて、続く(4)の考察の土台となつている点である。(イ)、(ロ)の対峙を経た(ロ)の採択という内実を担つた意味での *οὐκ* の扱い方は、以後登場しない。では、(2)↓(3)の途上で浮上したと同時に姿を消してしまつたこの問題は、何の意味もない無益な脇道だつたのだろうか。否、問題はまさにこの点にあるのではないだろうか。しかも、取り上げられた直後にあえて等閑に付されるという扱いそのものにも、そのようにする、あるいはせざるを得なかつた理由があるのではないだろうか。実は、この(イ)と(ロ)の区別を問題にしているときに、いわばこの視点を補強するものとして、まだここでは考察を保留している前掲のAとBの二つの言説があるのだが、これらがこの(イ)と(ロ)の区別への言及、および直後の不問の鍵を握つてるように思われるのである。AとB両者の類似構造のうちに微妙な、れが潜んでいることに注目したい。このずれが姿を消した問題の真の内実を示唆することとなる。別形での同一問題の再考察——それが、*ἐνεκα* (～のために)による分析となる。ともあれ、AとBに立ち帰り、両者を比較対照して考察を進めていきたい(本稿49～50頁参照)。

さて、命題(2)「善くも悪くもないもの(x)は、悪しきもの(a)が(自分のところに)存在するゆえに (*διὰ κακον*

*napoudiaz* (「善きもの(y)の友になる」における *stai* 句の二区分のうち却下される(i)のほうは、A、Bともに「悪しきもの(a)が「善くも悪くもないもの(x)」のもとに存在することによってそれ(x)自身も「悪しきもの(a)」になってしまった場合、「善きもの(y)」を愛し求めることはない」という同一の内容に還元することができよう。従ってこれは何も問題はない。

他方、(ロ)はどうであろうか。これをA、B両者ともさらに「(i)」と「(ii)」に区分して比較してみよう。「(i)」の部分はAもBも同様に、「悪しきもの(a)」が「善くも悪くもないもの(x)」のもとに存在しているにもかかわらず、それ(x)はまだ「悪しきもの(a)」になってしまっていない」という意味のことを述べており、内容の点で両者に相違は見られない。問題は「(ii)」のほうである。A(ロ)「(ii)」では、「(i)」で述べられた在り方(悪が「x」に存在していてもまだ「x」が悪しきものになってしまっていない在り方)をそのまま「そういう仕方 で存在すること (*aitn h napoudia*)」で受けて、まさにそのこと(つまり「(i)」の在り方)が「善きもの(y)」を愛し求める」という事態の成立を決めていると語られる。確かにこれはA(ロ)「(i)」の反復ではあるが、先の(イ)の在り方(「x」が悪になってしまおう)との対峙を見る限り、「(i)」ではないまさにこの(ロ)で語られた条件(「x」が悪になってしまっていない場合)こそが、「善くも悪くもないもの(x)」をして他ならぬ「善きもの(y)」へ差し向けることを定めていると述べているのである。しかしながらその条件は、この「善への赴き(愛する)」という事態の一切を語り尽くしているといつてよいのだろうか。否、むしろある重要な事態を語り残しているのではないだろうか。われわれは次のB(ロ)「(ii)」にそれを訊ねなければならぬ。

先のA(ロ)「(ii)」の場合には、「そういう仕方 で存在すること」はまさに文字通り承前以上の意味はなく、その内容がさらに吟味、詳解されてはいないのに対し、B(ロ)「(ii)」においては「そういう仕方 で存在すること」に相当することに焦点が当てられ、A(ロ)「(ii)」の内容以上にさらに「どのような仕方 で存在することなのか」が語り直されているのを見ることができる。つまりそこでは、まさにその在り方とは、「善くも悪くもないもの(ひと…x)」が自分の知らないことは知らない

とまだ考えている(認めている: ἐτι ἠποῦμένους) という事態を意味すると指摘されているのである。ここで重要なことは、B(ロ)〔ii〕が、 $\langle$ 悪しきもの(無知: a) $\rangle$ が $\langle$ 善くも悪くもないもの(ひと: x) $\rangle$ のもとにあるところの $\langle$ それ(そのひと: x) $\rangle$ の側からの立言である、という事実である。つまり、「 $\langle$ それ(そのひと: x) $\rangle$ の善(y)への赴き——A(ロ)〔ii〕ではあえて明示されていない——」が $\langle$ それ(そのひと: x) $\rangle$ の内なる問題、すなわち「ἐτι ἠποῦμένους(まだ考えている)」が重要な鍵を握る問題である、として捉え直されているのである。

このことからわれわれが注目しなければならないのは、「 $\langle$ 悪しきもの(無知: a) $\rangle$ が $\langle$ それ(そのひと: x) $\rangle$ のもとに存在する」ときの在り方が先の(イ)か(ロ)の二つの場合しかありえず、しかも、その両者の在り方が同時に $\langle$ それ(そのひと: x) $\rangle$ のもとに成立することは本来的に不可能である、そして、この(イ)と(ロ)の在り方の峻別、及び $\langle$ x) $\rangle$ のもとへのいづれかの成立を決定づけているのは、「 $\langle$ そのひと(x) $\rangle$ が、『自分の知らないことは知らない』とまだ考えている(ἐτι ἠποῦμένους)」「そのものが $\langle$ そのひと(x) $\rangle$ に生じるか否かはいったい何が決定しているのか、あるいは換言すれば、「ἐτι ἠποῦμένους」という事態がそこに生じている人とそうでない人とは、各々いかなるひとであったからこそ、それだけの在り方に帰着することになったのか、という問題であろう。しかし、先の対話篇の経緯に準じるならば、 $\langle$ 悪しきもの(a) $\rangle$ の二つの在り方を無視した命題(3)が公認され、内実は再登場した命題(2)でありつつ、それが以後の考察の出発点になっている以上は、AとBのずれから見えてきた先の「問われるはずの問題」もこの二つの在り方の峻別とともに対話篇の表舞台からは消え去っていると、とりあえずは言わざるを得ないだろう。

### 三 途上(その一)——δία(ゝのゆえに)からἐνεκα(ゝのために)へ——

それにしても、ここで述べてきた「ἐτι ἠρνούμενοι (まだ考えている)」をめぐっての一連の問題がごとごとく対話篇から抹殺されてしまっているところか、そもそも最初から何も問題などは存在しなかったと考えるのは、はたして正しいのだろうか。また、仮にそれが存在しているとして、何故対話篇は(イ)と(ロ)の区別、ひいてはそれを補強するAとBという一見同構造の、しかし微妙な差異を含む言明から行くべき道を暗示させながら、あたかもその道を閉ざすがごとき扱いをしてみたのか。前者の問いに対しては「否」であり、後者に対しては、「まさにこうした扱い方そのものが全ての問題の鍵を握っている」と答えたい。

第一の疑問に対する返答の理由は以下のとおりである。実は基本命題(1)以前とそれ以降の考察で、ソクラテスにより用いられていた主要な用語(terms)は同じものではない。前者では「愛するもの」φίλων、「愛されるもの」φιλούμενος、「憎むもの」μισῶν、「憎まれるもの」μισούμενος、「似ているもの」ὅμοιον、「反対のもの」ἐναντίον」などである。ソクラテスは基本命題(1)を規定する直前で、これまでのこれらの用語と決別し、「私が思うに、ものには三つの種類があり……(δοκεῖ μοι ἀσπερεὶ πρὶα ἄττα εἶναι γένη……: 216d5-6)」とことわりつつ、新たな用語を一旦無造作に導入する。それが「善きもの(τὸ ἀγαθόν)」「悪しきもの(τὸ κακόν)」「善くも悪くもないもの(τὸ μήτε ἀγαθόν μήτε κακόν)」である。この「ものには三つの種類があり」は厳密に言い換えるならば、「存在するものどもはすべてこの三つのいずれかの種に必ず所属する」という意味である。とすれば、ソクラテスが基本命題(1)以前の考察が陥ったアポリアを打開すべく、これらの用語を持ち出したと想像するに難くない。何故ならこの三つの種は存在するものすべてを網羅しており、もしこれらの語で「φιλεῖν (愛する)」「成立を掌握することができるとすれば、それは「φιλεῖν (愛する)」が語られている個々の場

を一に統べることのできるロゴスとなるはずである、という目論見があったからではないのか。しかし逆にこの三つの用語 (terms) で事態が語られるとすれば、それは全く論理上の言語レベルの位置関係を記述するだけで終わってしまう危険があることも否めない。διὰ (～のゆえに) による分析はこうした一次元的な規定に新たな次元での視野を導入したと言つてよい。

この διὰ (～のゆえに) による基本命題(1)への分析によつて初めて、<sup>1)</sup>「善くも悪くもないもの」に<sup>2)</sup>「悪しきもの」が現存する在り方に二通りある——これだけの指摘ではまだ論理的可能性を言っているだけなのだが——ことの指摘のみならず、その二つの在り方を規定するさらなる要因があるということが開示されたのではないだろうか。これまでの規定用語(が示した単なる論理、あるいは言語上の成立)とは異なり、あまりにも抽象化され、名辞のみが先行した<sup>3)</sup>「善くも悪くもないもの」が、実は「φιλεῖν (愛する)」の主体でもあることを再確認し、この存在による「自らの(ひとの)在り方への気づき(つまり ἐπιτηρούμενοι で表されるもの)」がまさに「φιλεῖν (愛する)」成立に極めて重要なその要因であることを示唆している箇所は、この διὰ 分析以外のどこにも見いだすことはできないのである。「φιλεῖν (愛する)」といういとなみは必然的に個において生じるものである。むしろそこに生じていることがはたしてまさに「φιλεῖν (愛する)」に値するものなのかは常に問われなければならないにしても、われわれが「φιλεῖν (愛する)」の成立に直に、関わる現場としての重要な位置を「ἐπιτηρούμενοι (まだ考えている)」は占めているのではないだろうか。<sup>4)</sup>

では次に、われわれ自身がこの「φιλεῖν (愛する)」成立に重要な仕方に関わり得る場が内在されている意味での「διὰ (～ゆえに)」の用法が、何故括弧の中に封じ込まれてしまったのかという第二の疑問についてだが、それは「何故 διὰ 分析の考察のみで議論が終結しなかったのか、ひいては何故その後に ἐνεκα (～のために) の分析が必要だったのか」という問いに言い換えてもよい。いづれにせよ、こうした問いそのものに意義があると考える理由については、先の第一の疑問そのものの問題に多分に連動している。これまでの考察から浮上してきた問題は、「φιλεῖν (愛する)」の主語に來たる者であるわれわれとその「φιλεῖν (愛する)」成立自体との関わりであった。先の考察では終始この者は<sup>5)</sup>「善くも悪くもないもの(X)」と呼ば

れており、名辞の持つその性質によって、「善くも悪くもないもの(x)は(悪しきもの(a)が現存するゆえに(善きもの(y)の友になる」という命題(2)、(3)に見られる各要素の配置が決定されていた。しかし、この位置づけを根本的に根拠づけている隠れたさらなる要因、「επιθυμειν(まだ考えている)」が示されたのであった。これまではいわばこの言葉の持つpositiveな面を強調してきたが、実はここには限界も存在するのである。この点が問題である。

δια(ゆえに)分析によって明示された「善くも悪くもないもの(x)が(善きもの(y)を愛する(φιλειν)」成立の根拠が、善くも悪くもないもの(x)のもとに(悪しきもの(a)が現存していることを(x)が気づいている(まだ考えている: επιθυμειν)か否かにかかっていたが、これはこの「気づき」の主体のところて成立の一切が決定する、という意味にもなり得る。もし成立の根拠がこれ以上遡源不可能であるとすれば、主導権を全面的に有した(気づきの主体(x)——言うまでもなくφιλεινの主体(x)——の自由な採択により(y)にいかなるものが入ってきてかまわないことになるだろう。たとえ(y)に(善きもの)が入らねばならないという規定があるとしても、(x)に採択権がある以上、その(x)に「善きもの」と映り(思われ)さえすれば何であれ、(y)の位置を占めることが可能となる。たとえば、「金を愛する」、「快楽を愛する」など。しかし、はたしてこのようなものが(y)に入ることを許すような(y)を求めるとなれば、「φιλειν(愛する)」という名に値すると言ってよいのだろうか。もしそれを許すならば、φιλεινに似て非なる「επιθυμειν(欲望する)」との区別が全くなくなってしまいうだろう。「あるものを求める」という点では酷似しているが、やはり両者は峻別されるべきである。「φιλειν(愛する)」が「επιθυμειν(欲望する)」と一線を画すものがあるとすれば、それは(y)に入るものの制限であろう。しかし、δια(ゆえに)は(x)の「φιλειν(愛する)」成立の直接関与の場を開示したものの、(y)に来たるべき選択肢を規制するものの存在までは示し得なかった。とすれば、その存在を射程に入れた、δια(ゆえに)とは別の視点からの命題の再検討が必要とされるであろう。その登場がもはや必然となった分析——ενεχα(のために)による分析は、このようなものと位置づけられよう。何故なら、先取りした言い方が許されるのであれば、そこではなにか(x(φιλειν

の主体〈と〉は別のところ、*φιλεῖν* (愛する) 成立を模索しているように思われるからである。

命題(3)に続く(4)(本稿50頁の図参照)の考察では、突然「*ἕνεκα* (～のために)」が登場する。それは無造作に「*καί* (～と; and)」によって「*διὰ* (～ゆえに)」と並列されているが、これからの問題は、*διὰ*構造のpositiveな意義を射程に入れつつ「*ἕνεκα*構造との関係を探究することである。いわばこれは、この「*καί*」の内実をさらに問うことだと言つてよい。

#### 四 「*ἕνεκα* (～のために)」による分析

「*ἕνεκα* (～のために)」によって導入された新しい視点とは何なのだろうか。本文に立ち帰つて考察してみたい。先に無造作に *διὰ* と *ἕνεκα* を並列させていた命題(4) (本稿50頁参照)は、若干の考察の後、次のような命題に帰結した。

- (5) *Tò ōute kakòu ōute dyathòu ára dià tò kakòu kai tò èxhòrou tou dyathòu φίλου ἐστίν ἕνεκα τοῦ dyathòu kai φίλου.*  
(219a6-b2)

「〈善くも悪くもないもの(x)〉は〈悪しきものや敵(a)〉のゆえに〈善くて親愛なるもの(b)〉のために〈善きもの(y)〉の友である。」

これを導出するにあたっては、次の病気の例、「病人(x)は病氣(a)のゆえに健康(b)のために医術(y)の友となる」が中介者となっているが、それによれば、「*ἕνεκα*の内実〈健康(b)〉は〈病人(x)〉が最終目的として目指しているところのものに見られよう。つまり、それ(b)は〈病人(x)〉をして *dià*の内実〈病氣(a)〉を引き金にまっすぐ〈医術(y)〉へと向かわせはするが、実はこれを通り抜けて〈病人(x)〉によって本来的に目指されている目的である」と (cf. 218e-219a)。ところがこの当然とも言ふべき解釈の仕方に対し、ここであえて異議を差し挟まなければならない。というのもここでのソクラテ

スの「*ἔνεκα* (〜のために)」の扱い方を見るならば、単純に〈健康(b)〉は〈病人(x)〉によって選ばれたうえで、一氣に目指されたもの、というわけでもなさそうだからである。注目すべきは命題(5)の直前に、それを導入するための予備的実例として挙げられた次の一文である。

(Prep. 5) *ἔνεκα δὲ τῆς υἱότητος τὴν φιλίαν ἢ ἰατρικὴν ἀνήρηται, ἢ δὲ υἱότηα ἀγαθῶν.* (219a3-4)

「〈健康(b)〉のために〈医術(y)〉は友愛(φιλία)を受け取るが、その〈健康(b)〉とは善きものである。」

この文中の「*τὴν φιλίαν ἢ ἰατρικὴν ἀνήρηται*」の直訳は右に記したとおりだが、特にこの箇所を中心に全体を敷衍するならば、①「(xから)〈医術(y)〉が友愛(φιλία)を受け取る」「(xから)〈y〉が愛される」のは、〈健康(b)〉を得るためであり、因みにこの〈健康(b)〉とは善いものである」、さらには②「(xが)〈医術(y)〉に対し友愛(φιλία)を抱く」「(xが)〈y〉を愛する」のは〈健康(b)〉を得るためであり、(xが)〈y〉に対し友愛を抱くようになったのも、この〈健康(b)〉〈自体がそもそも善いものだからだ」と言い直されてよいだろう。日本語の場合にはあえて( )に入れて挿入させた〈x〉なるものの存在が、原文では示されていないことに注目したい。これは、結果的には「φιλίαν(愛する)」といういとなみの主体(agent)となる〈x〉が明示されていないが、「φιλίαν(愛する)の主語〈x〉の不在」という実に奇妙な形で、しかも「φιλίαν(愛する)」の成立を語ろうとしている文なのである。無論「φιλίαν(愛する)」という動詞をここで用いていないのは、動詞の導入が主語の同伴を必然とするものである以上、意図的になされているのであろう。われわれはここにおいて「φιλίαν(愛する)」の成立の場面からあえて〈x〉が退場させられている、もしくは、今や〈x〉はその成立という事態に決定的な主導権を握っている中心人物ではなく、全く脇役に回されてしまっていることを認めざるを得ない。もはや〈x〉が誰であれ、誰かによって〈y〉が友愛を受けている(〈y〉を愛している)という事態が生じているとすれば、〈y〉を愛されるものになっているのは〈y〉に先んじて〈善きもの〉と決定している*ἔνεκα*の内実〈b〉なるものの存在であると、この

文章は語っている。あわせて、「διὰ (～のゆえに)」すら「φιλεῖν (愛する)」成立の要因として言及されていないことも意味深長である。要するに、この実例 (Prep. 5) を踏まえた先の命題 (5) に見られる三つの用語 (terms)、 $\langle$ 善くも悪くもないもの (x)  $\rangle$ 、 $\langle$ 善きもの (y)  $\rangle$ 、 $\langle$ 悪しきもの (a)  $\rangle$  と、 $\langle$  y  $\rangle$  とは別の後で付け加えられた  $\langle$  善きもの (b)  $\rangle$  は、もはや役割の比重が均等に課せられているのではない。いまや ἐνεκα に伴われた  $\langle$  善きもの (b)  $\rangle$  がこの全体構造の中核となり、あくまでこの  $\langle$  b  $\rangle$  との関係に基づいたうえでそれとは別の或るもの  $\langle$  y  $\rangle$  を  $\langle$  善きもの  $\rangle$  と決定づけることよって、それ  $\langle$  y  $\rangle$  が愛される対象に選定されているのである。われわれは命題 (5) を理解するにあたって、仮にそこに  $\langle$  善くも悪くもないもの (x)  $\rangle$  が「φιλεῖν (愛する)」の主体 (agent) として存在していても、実質的には主導権が ἐνεκα の内実  $\langle$  善きもの (b)  $\rangle$  に委譲されているという仕方では各要素が位置付けられていることを考慮にいれておくべきである。<sup>10)</sup>

それでは議論は命題 (5) 以降、どのような展開を見せるのか。ソクラテスは、或るもの  $\langle$  y  $\rangle$  が友 (φίλος) であるとするとそれは何か他の友  $\langle$  b (φίλος)  $\rangle$  のために (ἐνεκα) そうなのだ、という先の関係性をさらに強調し、「今度はその  $\langle$  b  $\rangle$  そのものが友 (φίλος) であるのも、それ以外の或る友 (φίλος) のため (ἐνεκα) なのであり、さらにまたその友も云々」のように次々と遡っていく (cf. 219c-d)。無論この無限後退を終結させる存在が要請されてくるわけだが、これは「これ以上他の友へと遡ることのない或る始源 (τινὰ ἀρχήν, ἡ οὐκ ἐπιφανοῖσιν ἐπ' ἄλλο φίλου)」<sup>11)</sup>「これのために他のすべてのものも友である」とわれわれが主張するところの第一の友 ἐκεῖνο ὁ ἔστιν πρῶτον φίλου, οὐ ἐνεκα καὶ τὰ ἄλλα φαίμεν πάντα φίλα εἶναι」<sup>12)</sup>と語られる (cf. 219c6-d2)。当然のことながら「この存在——なかでも特にソクラテスに強調されていた」何か或る友のために友であるのではない (... οὐ φίλου τινὸς ἐνεκα φίλου ἐστίν) という特質を持つ——が「ほんとうの友 (τὸ τῶ ὄντι φίλου) である」とが帰結事項となる (cf. 220b4-5)。が、それはほんの一瞬のこと、そこで議論を終わらせることなく、ソクラテスは迷う様子も見せずに「ところで  $\langle$  善きもの  $\rangle$  は  $\langle$  悪しきもの  $\rangle$  のゆえに愛されるのではないだろうか、それはこういうことなのだ (Ἀρ' οὐν διὰ τὸ κακὸν τὸ ἀγαθὸν φιλεῖται, καὶ ἔχει ὁδε : 220b8-c1)」と述べて先へ進む。この

わずか一文だけからでもわれわれはソクラテスの意向を窺い知ることができる。そしてある意味で、先の「第一の友」を目指すべき友であるとして議論を終結させずに、この方角へと方向転換させたのは正しいのである。何故なら、命題(5)はこれまでの主要な用語がすべて登場しているとはいえず、ここでは「*Evexa* (ゝのために)」に伴われた「善きもの(b)」と「*φιλειν* (愛する)」の主体の位置を占める「善くも悪くもないもの(x)」、および「*διὰ* (ゝのゆえに)」の内実「悪しきもの(a)」の内的な関係は全く問われなまま、単に一文中に整列させられているだけだからである。つまり、最も肝心な「そのために或るもの(y)が*φιλειν* (愛する)の対象として決められてくるところのその「始源」(ἀρχή)「第一の友」(*πρωτον φίλου*)と、実際に*φιλειν* (愛する)の主体になるもの(x)との接点が、命題(5)が示している体裁にも関わらず、このままの文脈では一切語られていないと言つてよい。要するにこれから問われるべきはまさにその内的関係なのである。われわれが求めているものは「*φιλειν* (愛する)」という装置の分解作業でもなければ、それが作動する仕組みの説明でもない。その意味で、いわば $\alpha\beta$ 構造からも、最終的には*φιλειν*の主体となる(x)からも切り離されていた $\alpha\beta\epsilon\zeta$ 構造を再度文脈に戻し、全体を一つの視野に収めようとしているソクラテスのここでの方向転換は、試みとしては重要なのである。

## 五 途上(その二): 跡絶えた道のり——*Evexa* (ゝのために)から*διὰ* (ゝのゆえに)へ——

さて、それ以降の議論についてはここでは問題にしないが、ともかくも以後議論はアポリアへの道を急速に転がり落ちていく。それは何故なのか。というのも、それはソクラテスが方向を転じて戻ったところが実質的には命題(2)、すなわちわれわれ自身が「*φιλειν* (愛する)」成立に重要な仕方に関わり得る場が内在されていない、 $\alpha\beta$ 構造を擁した命題だったからである。いま求められているのは、「*φιλειν* (愛する)」の主体(x)に関わらない仕方でも或るもの(y)が愛し求められることを決める「第一の友」(*πρωτον φίλου*)の存在を明示した $\alpha\beta\epsilon\zeta$ 構造を、その主体(x)が自分のもとに悪が現存している

と「まだ考えている (ἐτι ἤρῳύμενοι)」という、B(口)(ii) (本稿第二章参照)で光を当てられた「気づき」の契機を担った意味でのδιὰ構造に差し戻した新たな考察ではないだろうか。つまりそれは単に形式的にδιὰ(～のゆえに)とἐνεκα(～のために)の両構造を融合させるのではなく、先のδιὰがἐνεκαのさらなる分析を要請したのと同じ必然性をもって、今度はἐνεκαからδιὰへの道に戻り、「φίλειν(愛する)」の主体(x)を言及しないἐνεκα構造で現れた(第一の友(πρωτου φίλου)なる存在と、結果的には括弧に入れられてしまったδιὰ構造で初めて露にされた意味での(x)との関わり、しかも直接的な関わり現場——それがいかなる事態であり、いかにして可能であるのか——を問うことが、「行くべき道」だったのでないか、という意味である。

「悪(無知)が自らのところに存在しているも、いまだ悪しきもの(無知)になつてはおらず自分の知らないことは知らないとまだ考えている (ἐτι ἤρῳύμενοι)」とはいかなる事態なのか、および、一方でそのように「考えることがない」場合と対峙して、何故このことが可能になるのか。要するに、両者のひとの在り方を峻別しているものは何なのかという疑問は、まだ答えられていない問題なのである。この「まだ考えている (ἐτι ἤρῳύμενοι)」が「φίλειν(愛する)」の単なる論理的成立に寄与するものではなく、まさに或るひとのもとに発動する重要な契機になっていることは先の考察で確かめられてきたことだが、問いがまだ答えられていないというまさにその事実が、「まだ考えている (ἐτι ἤρῳύμενοι)」という事態を支えているなにものかの存在をわれわれに訴える。しかしプラトンはこの問題について直接的には何も語っていない。つまりこれは、「まだ考えている」ひと(＝φίλεινの主体)が射程に入ったδιὰ構造と「第一の友(πρωτου φίλου)」の存在を開示したἐνεκα構造が一つの視野に収められた一文——要するに「行くべき道」の最終地点——をプラトンは対話篇のどこにも書き記していない、ということでもある。それは一文といういわば一元的な直線上に事態の一切を繋ぎとめることができなからではないのか。しかし、そこにはおそらく少しも否定的な意味はなく、あくまで問題の所在を告げ知らせる地点まで導くことが対話篇の役目であり、あとはこのδιὰ(～のゆえに)とἐνεκα(～のために)の各々の分析で示された事態を、われ

われの問題としてわれわれの内に再現することだけが唯一われわれに残された方途であるのではないだろうか。

### 註

- (1) 「リュシス」篇の副題は「友愛 (*philia*) にて」とある。しかし「*philia*」という語は用いられても (207e11, 214d7, 215d4, 216b1, 217e9, 219a4, 220b3, 221d3, 221e4, 222d2) 、『それが吟味の対象として議論の現場に登場することはない。すなわち「友愛とは何か (*ti estin ti philia*)」という問いは「まさにそれが問い質されるべきものとしてこの対話篇の主題となることは最後までないのである。』これについて D.N. Levin 氏「考察の対象は「friendship (*philia* : 友愛)」ではなく「friend (*philo* : 友)」であると指摘してこそが (D.N. Levin : Some Observations Concerning Plato's *Lysis*, *Essay in Ancient Greek Philosophy*, ed. J.P. Anton & G.L. Kustas, Albany, 1971, p. 239) 、『これは「*philia*」ではなく』と云う点については正しいけれども、『*philos* (名詞)』を問われるべきものに置いている点が問題である。とはいえ、問いの形式で主題がないというのではなく、『やはり「*ti estin*」の問いの形式が、明示的ではないにしてもこの対話篇には脈打っている。すなわちそれが「*ti estin ti philia* (愛する) が成り立つのか (— *philein* とは何か)』であると云ってよい。
- (2) 「*ti hypobolou* (まだ考えている)」が重要な位置を占めているとはいえ、この語そのものが他のいとなみから「*philein* (愛する)」を峻別してまさにそれであると規定し得る決定的な「知」を指していると言っているわけではない。むしろそれは問題の所在のほんの入口を指しているだけであり、自分のもとに悪が現存していることの自覚であるこの「*ti hypobolou* (まだ考えている)」を可能にしているものが何であるのか、何故それがわれわれ人間に許されているのかをさらに問題なのである。
- (3) この「*euera* (〜のために)」は厳密に言って「技術 (*technē* : 例えば「建築術」) における目的因 (*telos* : 「家」と同一視することには問題があるだろう。というのにも「家を建築する」という行為が生じているとすれば、そこには「家を建築する人 (「建築家」) の存在が自明であり、そしてその人の何であるかは「建築術 (専門知識) を持った人」と定義することが可能である。すなわち、この専門知識の有無によって、建築家か否かが容易に判定できるのである。他方「愛する (*philein*)」の場合、このいとなみが生じているかぎり、そこにはそれを行なっている人が存在することは必然であっても、その内実を規定することは少なくとも建築家と同様にはできない。ここでの「*philein* (愛する) の主語〈X〉の不在」という実に奇妙な記述がまさにその内実規定が困難であることをもの語っている。

(平成八年度本学大学院博士課程修了)